

Title	特集「社会史と文学」について : E. P. トムスンを追悼する
Sub Title	Preface : in memory of E. P. Thompson, 1924-1993
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1993
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.3 (1993. 10) ,p.163(1)- 169(7)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 社会史と文学
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19931001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「社会史と文学」について

— E. P. トムソンを追悼する —

『三田学会雑誌』としては、いささか異色の特集号である。経済史ならば従来も本誌で特集を組んだことが幾度かあったが、社会史は初めてである。社会史は経済史と深く関連しながらもそれとは異なる比較的新しいジャンルである。社会史は、今日の歴史学の専門化・分断化が極度にすすんだ結果、ある時代のある国の全体像が捉えにくくなっているという意味で危機的な研究状況にあるとの認識から、それを克服するために多数の関連するディシプリンの方法と成果を批判的に摂取することをひとつの特徴としてきた。この特集号は、社会史と文学との境界領域を扱う8本の論文を掲載している。ここでの「文学」はやや広義のそれを意味しており、小説、戯曲、回想録だけでなく、ピラ、暦、楽譜といった印刷物を含むものと理解していただきたい。

「社会史と文学」というテーマにとって、E. P. トムソンの知的活動を考慮することなしに研究を推進することはできないであろうが、そのトムソンがこの特集号編纂中の1993年8月28日に亡くなった。1924年生まれであるから、69歳の死である。イギリスのウォーリック大学社会史研究所の初代所長をつとめたのは、1965年から71年までであったので、私とその社会史研究所に着いた72年には所長はすでにR. ハリスンに代わっていたが、トムソンの著した『イングランド労働者階級の生成』は圧倒的な影響力をもっていた。その本を労働史研究のバイブルだといった人もいたのを思い出す。かれが1955年に刊行した『ウィリアム・モリス』は800ページを超える大著であるが、そのなかでスターリン批判をすでにおこなっていたのは、驚くべき慧眼であった。公式にスターリン批判がおこなわれる1年前にである。トムソンはその後、組織にたいする不信から18世紀・19世紀初期に研究時期を遡らせ、『イングランド労働者階級の生成』を著して、労働組合や政党などの組織が確立する以前の食糧暴動などに民衆のなかの革命的潜在性を求めたのである。そして、従来は遅れた意識をもった、歴史に逆行するとされたコモン・ピープルを歴史の舞台に復権させ、照射したのである。900ページを超えるその著書は、今日ではいわゆる「文化的マルクス主義」の古典になっている。刊行は1963年であるから、今年が30周年記念の年に当たり、この10月にウォーリック大学で記念の会合が予定されていた。それが追悼の会になったので、奇しくもG. D. H. コールと同じ軌跡を辿ったことになる。

コールの70歳を記念すべく、当時イギリス労働史の中堅研究者A. ブリックス、E. J. ホブズボ

ーム、R.ハリスン、S.ボラード、J.サヴィル、そしてE.P.トムスン等が記念論文集を作成していたが、その準備中の1959年1月に、コールは死去。コールの享年も69歳であった。その論文集は追悼論文集として翌60年に刊行されたが、この珠玉の作品を集めた『労働史論集』は、イギリスにおける研究が従来の労働運動史から労働史へ、つまり運動の指導者の思想と行動の歴史から一般の組合員、未組織労働者の歴史へと大きく旋回する契機となった。トムスンはそのなかで、「トム・マッガイアー讃歌」を寄稿した。また、1971年の『知られざるメイヒュウ』と題するアイリン・イエオとの共編著で『モーニング・クロニクル』から抜粋・編集し、ローントリーではなくメイヒュウを「最初の社会調査家」と評価したのもトムスンであった。

パリのカルチェラタンから全世界に広まった1960年代末の学生の反乱は、イギリスでは発火点はウォーリック大学であり、しかもトムスンであった。この間の事情は、かれが『ウォーリック大学株式会社』という本を出して詳細に記録しているのでここでは述べないが、結局、大学当局に抗議して（と推測される）大学を辞職。以後は在野で研究をつづけたが、その間もときどきウォーリック大学でペーパーを読んだことはあった。そのなかののひとつで、私がつよく印象づけられたことがあった。トムスンは、経済を「土台」として法律を上部構造としているマルクス主義の分析枠組みを、現実には歴史分析に適用したらどうなるか、といて、エンクロージャーを例に挙げ、エンクロージャーのここままでが経済に関係し、ここままでが法律にかんすることだと分けることはできない。このように、土台・上部構造という枠組みでは実際の歴史分析はできないのだ、と主張したのである。つづいて、理論偏重のあり方を厳しく批判し、理論と「経験」とは相互関係にあり、理論が史料から明らかにされる「経験」に合わなければ理論は修正されねばならない、と力説した。これは、構造主義者、とくに、アルチュセールを念頭においた批判であり、この批判はまもなく1978年に『理論の貧困』となって出版され、大きな反響をよびおこした。

1979年にオクスフォードで開かれた「ヒストリー・ワークショップ」全国大会では、トムスンがメイン・スピーカーとなり、1000人程の聴衆をまえに、「構造主義というテロリズムがすでに文学を占領した。いまや歴史学の分野に進軍しつつある」とやった。白髪をかきあげながらの火を噴くような雄弁な語り口は、おおくの聴衆を刺激し、夕方からはじまった集まりはトムスンにつづくJ.サヴィルとS.ホルの報告のあと、壇上に上がって意見を述べるものが後を絶たず、深夜12時をすぎてもまだ議論がつづくという状況をつくりだした。

1980年代になるといまは歴史研究をやっているときではないと自らの歴史研究の停止を宣言し、反核運動の先頭にたった。87年だったか、ENDの大会がコヴェントリー市で開かれたとき、偶然市内の喫茶店で大会にきたトムスンと夫人ドロシーに会ったことがある。その後、90年来日を実現するべく、古賀秀男、近藤和彦両氏と準備し、日程も決まったが、当時アメリカ滞在中のトムスは病を得て、来日を断念されたことがあった。ついに一度も訪日を果たせなかったのである。翌年91年秋にはドロシー夫人だけが来日、この時は慶應大学でもチャティズムについてのペーパー

を読まれた。92年3月、リヴァプールでの労働史学会でドロシー夫人と再会したときには、エドワードの病状はなお余り良くないとのことであった。91年の『共同の慣行』が生前最後の著書に、92年の『異邦人讃歌—タゴールとE.トムスン』が最後の編著になった。長年とり組まれた『ウィリアム・ブレイク』は遺作として刊行された。

本号の巻頭論文の執筆者フレッド・リードは、ウォーリック大学歴史学部のシニア・レクチャーであり、長年トムスンと親交を結んでこられたが、今回トムスンの死を悼むつぎのようなかれのメッセージが送られてきた。

「エドワード・トムスンの1993年の死は、この特集号「社会史と文学」で看過されるべきではない。トムスは歴史家であると同時に詩人であり、歴史を書くにさいし小説を読むことから深い洞察を得た。かれの最初の長編作品『ウィリアム・モリス』（1955年）は、イングランドの指導的著述家・芸術家の政治的伝記であった。トムスはモリスを、中央集権化した国家権力にたいして、また、社会主義政党を含むあらゆる政党の「機械的政治家たち」にたいして、信頼をおかない社会主義戦略の重要な思想家とみなそうとした。トムスは『イングランド労働者階級の生成』（1963年）のなかで、この抵抗の伝統の根源を辿るためにジョン・バイヤンやウィリアム・ブレイクのような著述家たちに注目し、これを「生れながらにして自由なるイングランド人」の権利という信念の起源であるイングランドの非国教徒と結びつけた。モリスと同じく、トムスは、コモン・ピープルの経験を土地の囲い込みや機械生産の発展といった社会変化の大きな過程を経て生きてきたものとして理解しようとした。トムスは理解を助けるものとして、社会学には余り眼を向けずに（かれは、社会学を信用しなかった）、チャールズ・ディケンズやトマス・ハーディーなどに眼を向けた。ディケンズの『ハード・タイムズ』とハーディーの『カスターブリッジの市長』から得られた洞察は、トムスの「時間、労働規律、産業資本主義」（1968年）や「18世紀イングランド群衆のモラル・エコノミー」（1971年）のような論文にみることができる。ウォーリック大学社会史研究所の所長として、トムスは歴史叙述の新しい「スタイル」で、すなわち、小説と文芸批評からひきだされる洞察により豊富化されるようなスタイルで、大学院生を教育することを目指した。このようにして、トムスは一方では「無味乾燥な」経験主義の、他方では過度に抽象化された社会理論の、人間性を奪うような影響を克服することを期待した。トムスンとともに研究した我々は、かれが疲れを知らない教師であり、著述家であり、批評家であって、コモン・ピープルにたいする「後代の極めて慇懃無礼な態度」から救済しようとする我々の努力にたいし、骨身を惜しまなかったことを忘れな

いだらう。」

近藤和彦はトムスンの影響を強くうけた18世紀イギリス社会史・民衆史の研究者であるが、「トムスン死す」の報を私に電話で知らせてくれたかれの声は動揺し、悲しみに満ちていた。かれはつぎのような追悼文を寄せられた。

「8月最後の日曜日にある合宿研究会から帰宅してみたら、不在中の伝言があり、その前日にエドワード・P・トムスンが亡くなったという。数年前から具合は良くなかったが、執筆と外出はつづけていたし、夫人も予期していなかったようだ。わたしの場合、1975年『現代人名事典』（朝日新聞社）に簡単な項目を書くために、そのころ合衆国にいたトムスンに略歴などを問い合わせたときに文通がはじまり、断続的につづいた。最近でこそ、いくつかの点でわたしはトムスンの議論に不満を覚えたが、70年代くらい彼の書いたものから無限の刺激を受けてきたし、彼がいなかったら18世紀社会史を研究しなかったかもしれない。わたしのインスピレーションそのものと呼んでもいい人であった。

近刊の拙著『民のモラル』では18世紀を中心とする近世イギリスの文化と社会を論じながら、いわばトムスンから学んできたわたしの歴史学を総括し、新しい道を模索しようとしていた。奇しくも、その校正がほとんど終わりそうなときに訃報に接した。もう直接お会いして討論することもできないし、遺稿は別として、今後の新しい仕事を期待することもできない。悲しみと同時に、せつなく意気込んでいた出端をくじかれたような気持ものこる。想いは乱れながら『思想』10月号に追悼文を書いた。」

その『思想』の追悼文は、「知識人＝歴史家の死」と題された4ページのかかなり長いものであるが、トムスンの一生が淡々と語られるなかにも近藤和彦のトムスンにたいする学問的愛情が切々と伝わってくる。ウースターのトムスン宅での4時間の「身も心も高揚してしまう午後」のことにも触れ、「人として、知識人として、人類史における近代の意味、あるいは文明における歴史といった根本的なところまで考え行動した愚鈍なまでの誠実さが世界の多くの人を惹きつけてきた。これからも思い出と文章をよすがに人々を惹きつけつづけるだろう。」と書いている。

また、草光俊雄は、つぎのような文を寄せられた。

「1975年にイギリスに留学した時、彼は既に伝説的になっていた。特に若い世代の間にその影響力は圧倒的と思われた。『メイキング』と敬愛の念で呼ばれた『イングランド労働者階級の生成』はたった一冊でおそらく戦後の歴史学の流れを大きく変えてしまった。私はあまりにも彼の存在が高すぎるような気がして、もっと研究が進んでから、と思って自分から会いに行くことはしなかった。労働史学会の20回大会（1980年）に珍しく発表者として来た時に短い言葉を交わしただけであった。書く論文がその度に論争を呼び、常に新鮮な問題提起を含んでいる歴史家はエリック・ホブズボームとトムスン以外私は知らない。強靱な思索力と目を見張る資料の発見との組み合わせ、それを文学的な叙述に高める文章力は全く希有であった。」

本号を構成する論稿は、すでに述べたように、社会史と文学の境界領域を扱うが、これらは歴史研究と文学作品の共通性と差異性はどこにあるのか、歴史学が広義の文学から（あるいは逆に文学が歴史学から）なにを吸収し、豊富化できるのか、といった点を追跡する試みである。もとより寄

稿者は統一した見解をもっているわけではない。富山太佳夫を除けば、他の寄稿者は社会史学徒である。否、文学者とか社会史家とかジャンル別に区別することが意味をなさない学問状況になってきている、というほうが正確かもしれない。

巻頭論文執筆者のフレッド・リードは、労働党創始者キア・ハーディーの研究によりオクスフォード大学で博士号を取得し、著書『キア・ハーディー』（1978年）を刊行したが、以後、ウォーリック大学歴史学部で教鞭をとりながら、小説家トマス・ハーディーと社会史の研究にとり組んできた。本稿では、ハーディーの作品から主として『カスターブリッジの市長』と『ダーバヴィル家のテス』を事例研究としてとりあげ、文芸批評と社会史の境界領域と両者の緊張関係を検討する。前者の作品は、E. P. トムスンが食糧暴動史研究でとりあげているから、トムスンの「社会主義的ヒューマニズム」の方法も検討されることになるが、トムスンの方法はR. ウィリアムズとともに、G. ルカーチの全体性把握の伝統のなかに位置づけられている。リードはポスト・ソシュールの批判にも一步距離をおき、また、「古典的リアリズム」としてテキストをすべて具象化するのも誤りであるが、現代的社会主義にひきつけてテキストを読解するのも誤りであるとする。しかし、歴史学が文芸批評から学ぶべき点は多いとするのがリードの主張するところである。かれは、完全な視力障害者である。長年にわたり全英視力障害者協会の会長をつとめ、障害者にとって希望の星でありつづけている。

近藤論文は、1715年のジャコバイトの騒擾とそれにたいする「騒擾法」の制定をめぐるものである。まず、「モップ」という用語が当時どのような意味で使用されていたのかを検討したのち、イングランドとスコットランドの各地で生じた群衆行動が、15年7月の「騒擾法」制定までのほぼ1年間にわたって叙述され、ジャコバイトと政府・ホウィグとの対抗関係の展開が示される。そして、騒擾法の制定過程、起草委員の経歴、条文の特徴を明らかにすることによって、条文には前世紀以来のピューリタニズムと共和制の実験、王政復古、名誉革命、そしてハノーヴァ朝の成立といった政治文化の歴史的なありようが反映していると主張する。

つづく矢野論文、高神論文も暴動・蜂起を扱うものであるが、両論文とも現実の暴動とそれを表現した戯曲や回想録とのズレに注目し、歴史学と文学の方法の特徴と差異を浮き立たせようとしている。

矢野論文は、ドイツのシュレーゲン織工の蜂起（1844年）を題材にしたゲルハルト・ハウプトマンの戯曲『織工』を分析することによって、戯曲に表現された「織工」像を析出する一方、同時代人の叙述や史料をもとにシュレーゲン織工の生活世界を行動・態度の歴史学的分析をおこなうことによって、「織工」像を再構成している。両者を比較検討することによって、「文学的想像力」と「歴史学的想像力」の差異を明らかにしている。

高神論文は、アイルランドのダブリンにおけるフィニアンの蜂起（1867年）の史実と回想録のズレを問題にする。デヴォイの書いた回想録は後世の歴史家にも影響をあたえ、今日でもそれにもと

づいた研究がなされているが、高神のダブリン警察記録などにもとづいた蜂起前後のフィニアン組織および蜂起の分析は、デヴォイの回想録が蜂起の限定的側面しか扱わず、さらに当時デヴォイのおかれていたフィニアン内部の位置から歪められて叙述されたことを明らかにする。

富山論文はヴィクトリア時代の引越しをとりあげる。この問題は、歴史学がすでにもっている住宅問題や人口移動といった枠組みではなかなか扱えないものかもしれない。文学作品から用例をひきながら、引越しという問題が不動産業や広告業とからむ側面に照明を当てようとするのが、この論文である。

遠藤論文は、19世紀末から20世紀にかけてのイギリスの「フォークソング協会」の活動を、とくにブロードウッド女史に焦点を合わせて描いたものである。農村の民衆のフォーク・ソングを収集するさい、収集者であるブロードウッドのようなミドル・クラスの価値観により粗野な猥褻な歌詞が削除されたり改変されたことを指摘し、ミドル・クラスの文化と民衆の文化との対抗関係を例証する。

草光論文は、森鷗外の『澀江抽斎』などの史伝を、イギリスのオーラル・ヒストリーの方法と重ね合わせて分析する。儒家医師澀江抽斎を迎える契機が『武鑑』の収集であったことから始まり、事実探索のため抽斎の子孫まで訪ねて情報収集をおこなうなど異常な執念をもって情報収集する過程、さらにそれを分析する過程のなかに、オーラルと文献双方の批判的使用がみられるとし、「史伝」が社会史の方法と軌を一にしていることを指摘し、さらに社会史が広く文学から吸収すべき新たな視点をみいだそうとしている。

松村論文は、ステドマン・ジョーンズの「チャーティズム再考」(1982年)にみられる「言語論的旋回」について検討する。言語は直接的指示対象をもたないとするソシュールの理論をチャーティズム研究に適用し、その運動が政治運動であり、17世紀以来の急進主義の延長上にあるとするかれの分析は、従来のチャーティズム研究史をすべて経済的・社会的分析であるとして華々しく全面否定したわりには、成果が乏しい。このような実体分析を切り離し、ディスクールの分析に閉塞する方法は、歴史学にとって自殺行為であると主張する。

この特集号は、1992年9月11日—13日に箱根ホテル小涌園で開かれた「社会史コンファレンス」に端を発している。コンファレンスでは、以下のような研究報告がなされた(報告順)。

矢野久「第2次世界大戦期ドイツの東部占領地域での労働力調達」

松村高夫「日本軍による中国での細菌散布、1940—41年」

村山聡「ヴッパー・タール地方における改革派のゲマインデ形成」

西沢保「歴史主義・統計・物価」

木村和男「イギリス植民地(帝国)会議における帝国=自治領関係の展開 1887—1911年」

鷲見洋一「神は細部に宿りたもうか?—ディドロ『オランダ紀行』の一節を読む」

富山太佳夫「人口移動の社会史的側面—ヴィクトリア時代における引越し」

草光俊雄「鷗外の史伝と社会史」

近藤和彦「暦の象徴性—名誉革命体制と叛乱」

森建資「雇用と団結」

大島通義，宮崎洋の両氏が司会の労をとられた。他に川島昭夫，勝康裕の両氏が参加された。

以上の報告のうち，当初は社会史と文学を扱った報告を中心に「小特集」を組む予定であったが，論稿がコンファレンスへの非参加者のものも含めかなり多数になったので「特集」とした。

このコンファレンスへの参加者および本号の寄稿者は皆，E. P. トムソンの早すぎる死を悼むものである。本号をIn memory of E.P. Thompson, 1924-1993とし，E. P. トムソンに捧げることをお許し願いたい。

松村高夫

(経済学部教授)